

ぐんまプログラミングアワード 高生が最高賞を受賞



受賞を喜ぶ佐藤くん

プログラミングの能力や発想力を競う大会である「ぐんまプログラミングアワード(GPA)2022」に、佐藤弘基くん(3の1)が出場した。GPAはプログラミング教育の推進と人材育成を目的に、2017年に始まった。佐藤くんは、IoT部門で優勝し、さらに、全部門を通じた最高賞のMVP・総務大臣賞を獲得した。

そこで、佐藤くんに話を聞いた。発表の内容について、「現実を3Dスキャンして再現したデジタル空間上に、ユーザーの着座状態をリアルタイムで反映させるシステムを構築した。これにより、どこからでもそのユーザーが部屋にいることがわかり、搭載されているボイスチャット機能を使えば、ちょうどよいタイミングで話しかけることができる。また、Webカメラから

でも情報の取得が可能で、リモートであっても、対面であるかのようなコミュニケーションをとることができる。3Dモデルを用いて、気軽に雑談をしたり、一緒に作業をしているかのような一体感を得たりすることに繋がる」と語った。このシステムの開発のきっかけについては、「もともと2年生の時点で、新型コロナウイルス対策として、リアルタイムで室内にいる人数と二酸化炭素濃度から警告を発するシステムの開発を行っていた。そこで、コロナ渦中ではなく、コロナ後の社会に目を向け、作品を開発した。当初想定していた社会課題は、『対面で働きたい人とリモートで働きたい人が同時に存在すること』であり、両者がより円滑にコミュニケーションをとるためのツールとして開発した」と述べた。(小松)

クラTジャパンカップ 3-1が大賞



9月29日にYouTube上で、CLAT JAPANで作製されたクラスTシャツの中から特に素晴らしいものが選ばれたクラTジャパンカップが開催され、3年1組のクラスTシャツが大賞に輝いた。そこで、クラス委員長である山下遼くん(3の1)にTシャツ込めた想いを聞いた。山下くんは、「担任の大久保先生の格言である『AIにはできない翻訳』を踏まえ、『3年1組にしかできない翻訳』をテーマに作った。授業中に先生方が残した名言の英語版を生徒用にし、先生用は日本語にした。いつの日かタンスの奥にしまっていたのを見つけた際、3年1組の一人であったことを思い出し、クスッと笑えるようなものになると嬉しい」と語った。(新井)

数学キヤン 「円の世界」への導き



10月9、23日の2日間にかけて群馬県高校生数学キヤンが行なわれた。数学キヤンとは、平成10年度から県の教育委員会が主催している、県内の高校生を対象としたイベントである。本校からは1年生22人、2年生28人、3年生1人の計51人が参加した。数学キヤンでは、1日目は講義とテーマ演習が行なわれ、2日目はそれぞれの班で個人研究の後、その内容について発表した。今年度の全

坂本くんは、「志甫教授の講義では、解答が一般的に示すことができるかわかり驚いた。また、複素数を用いて解答を示すという点も、代数学的な関わりが見えて興味深かった。逆井准教授の講義では、ある長さの線分を作図できるのかという、作図可能性の話に関心を抱いた。また、自分たちの班は球上の格子点というテーマで発表した。このテーマは現在の知識では扱いきらぐ、あまり進展はなかったが、多角的に式を眺め、法則を見つけたというのは貴重な体験だった」と今回のキヤンでの収穫を述べた。(小松)

説 論

かけがえのない「一瞬」

「一期一会」という言葉があるように、古来より日本人は一瞬、一度などのわずかな時間を大切にしている傾向がある。ところが、現代的な技術の発展によって、近頃そういった傾向が薄れつつあるように感じる。

先日、高崎祭りの花火を見に行った。花火というものは、わずかな一瞬に大きな音と空

しかし、周囲を見渡すと、スマホを構えて写真を撮る人ばかりである。カメラ越しに見たところで意味があるのだろうか。それでは、迫力や余韻を味わえず、花火本来の楽しみ方はできない。私も、花火をカメラに収めたことがあるのだが写真で見た花火は、その場の空気感や音を感じ

確かに、楽しみ方は人それぞれであり、「一瞬を何度も楽しみたい」という意見もあるだろう。だが、それでは一瞬としての価値が下がってしまう。一回で留めておくからこそ、一瞬が成立し、最大限の楽しみを味わうことができるのではないだろうか。

高度に技術の発展した現代社会において、写真以外にも動画など、実際に起こった出来事を守る方法がたくさん存在する。しかし、そのどれを選んででも迫力や余韻を肌で感じることはできない。それにもかかわらず、多くの人は手当たり次第に一瞬を保ちようとするのである。もったいなくはない一瞬そのものを大切にしてみたいだろうか。(大手)
